

豪雪

日本海側の豪雪はいまから一万三千年ほど前から始まり、八千年ころから現在のような姿となったという。二万年ほど前まで続いたウィスコン氷河期の時代は、海水が雪となって氷河に積み重なり、海面は現在より一〇〇メートル以上も低かった。朝鮮半島と日本列島を隔てている浅い海峡に阻まれた暖流が、日本海に流れ込めず当時の厳しい寒さのなか内海となって孤立していた。氷河期が終わり気候の温暖化が進むとともに海面が上がりはじめ、間歇的にそして本格的に暖流が侵入しはじめたのがおよそ1万3千年前である。

日本海側の地方に降る豊かな雪と穏やかな海洋性の気候への気候変動は、ブナの森林を急速に育て、日本文化の原点である縄文式文化が開花し始めた。世界最古の土器でもある日本最古の縄文式土器がこの年代の地層から出土している。花粉が語る古代の気候変動を探る研究の第一人者、安田喜憲氏の多くの著書のなかで「森と文明の物語(ちくま文庫)」が楽しく読ませられる。

日本海側の豪雪は、シベリヤ大陸上で放射冷却によってできた寒気団が、地球規模の流れである偏西風の蛇行で寒気の大氾濫を起こし上空の寒冷渦とともに襲来、暖かな日本海で豊富な熱と水蒸気をもらって雪雲がまとまり大雪をも

たらしている。対馬暖流の流入のほか豪雪にはさらにいくつかの条件が重なる。なぜシベリヤ大陸にあのように大規模かつ長い期間、厚さ三メートルにおよぶ寒気が滞留するのがその一つである。チベット高原とヒマラヤ山脈がなければ、シベリヤ高気圧は止まっていれず、すぐに移動性高気圧となってしまう大雪は長続きしない。

なぜ北陸に豪雪かと問われれば、もう一つの条件、朝鮮半島とそのつけねにある白頭山を中心とする山々の存在があるからという。豪雪が続いている時の気象衛星ひまわりの写真を見ると、寒気の吹き出しとともに北西季節風に沿って筋状の雪雲の列が並んでいるが、よく見るとその中で日本海西部から北陸地方に伸びる帯状の長さ500kmを越える長大な雲の帯を見ることが出来る。ひととき活発に輝いている積乱雲の列があり、雲の渦が並び、流れと直角の方向に並ぶトランスバースの雲の列といったものが興味深く確認できる。豪雪をもたらす特別な長大な雪雲が白頭山系の風下側にできて、北陸をめざして雪を集めている姿が見える。大陸の地形がまともに影響し、まさに宿命な場所に北陸地方が位置しており、この緯度にしては世界の類をみないほど豪雪地帯となっているのである。

その中で記録に残る豪雪は、敗戦間近かの昭和二十年の豪雪と三十八年サンパチ豪雪である。全国の気象官署のなかでの最深積雪の記録が雪の高田の三層七七センチであり、当時の中央気象

台の委託観測所だった富山県真川の七層五〇センチという大記録があるが、いずれも昭和二〇年の豪雪の時の記録である。昨年、尾瀬の冬をとったドキュメンタリーが放映されたが、例年になら豪雪で、三層の雪のポルが見るまに埋まり、さらに継ぎ足して二本目でやつと五層を越える雪の深さを測っていた。この豪雪で雪解けが遅れ水芭蕉の見頃がひと月遅れの六月中ごろとなったとの記憶も新しい。

雪の深さはふつう三層の雪尺というポルをたてて測かる。真川の大記録の時には、雪尺といっても竿を二本目つなぎ、二階から雪の面に這い上がって測ったと報告されている。高田で四層近い積雪の時には、日々の雪を合計して重ねると二七層二九センチ、六階建てのビルが埋まる深さとなった。七層を超す積雪の深さになるにどのくらい雪が降るか想像し難い量である。

この冬は太平洋側の地方でも記録的な大雪が降って日本列島は雪一色に塗りがえられていた。まさに昭和二〇年は焦熱地獄であり雪地獄でもあった。一八年後、世界中を異常気象に巻き込んだ一九六三年の冬、サンパチ豪雪が北陸を直撃した。雪害という言葉が頻繁に登場しただしたのもこの頃からである。二〇年、三十八年、⑥豪雪と十八年でくりかえされた北陸豪雪が、この繰り返してくれば今世紀中にも再びというのは杞憂だろうか

。 越後の雪深い郷で書いた鈴木牧之の「北越雪譜」(野島出版)には、およそ、初雪は九月の末十月の首(はじめ)にあり。…一昼夜に積もるところ六七尺より二丈に至る時もあり。往年(むかし)より今年に至るまで此雪此国(越後)に降らざることなし。されば初雪を觀て吟詠遊興のたのしみは夢にもしらず、今年も又此の雪(の中)に在る事かと雪を悲(しむ)は辺郷の寒国に生まれたる不幸というべし。雪を觀て樂しむ人の繁花の暖地に生まれたる天幸を羨ざらんや」と書かれている。ヒマラヤを削り、白頭山を削り、暖流を堰き止めれば豪雪は終わるが無理な話である。ユーラシア大陸と日本列島という宿命を背負つての豪雪地帯なのである。